

貞世奇蹟考

庫文閣内			
三五函	一八九九	和	類
二架	五冊	號	類

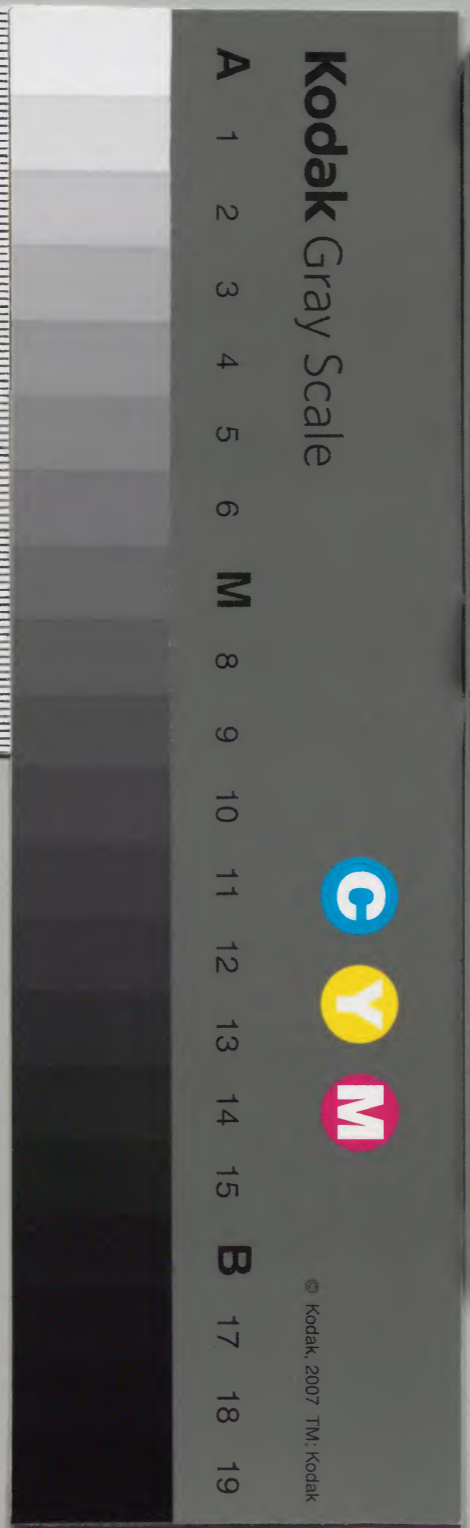
庫文閣内			
三三函	一八九九	和	類
五架	五冊	號	類

内閣文庫			
番號	和	18989	
冊數	5 (1)		
函號	213	60	

香齋書棚

隨筆 十三ノ四

共五



213-60

醒醒老人著

武清先生畫

瑞玉堂藏版

音の跡考序

搬演傳多之書。其來朗試夫

況人之話皆可以守愚心致之疑。

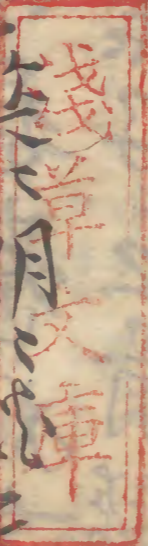
三の_三情_三可_三疑_三の_三懼_三之_三事_三皆_三可_三

心_三同_三以_三疑_三の_三疑_三の_三懼_三之_三事_三皆_三可_三

心_三同_三以_三疑_三の_三疑_三の_三懼_三之_三事_三皆_三可_三

秋之熱血矣。其_上疑_三の_三懼_三之_三事_三皆_三可_三

功_三亦_三為_三不_三少_三矣。其_上疑_三の_三懼_三之_三事_三皆_三可_三



近世奇亦考

卷之一

八

三

體以下適達于原。不据其心。如
影。摺百般。呈佛。圖真。為迷。
作之巧。故現造化。未生之人。於
三子界裏。裹抽。一旦。古來。古之事。
於億萬劫。聞之。聞創見。以
肆詭詞。以美青。自天白日之世。
界。其活活。漫漶。委巷。如女
之。日月。論。俠士。君子。之骨。髓。

之。及使。其人。偉事。了矣。誠。湮沒
不傳。埋。竟。失信。焉。與其。誣世。之害。
不。為。不。力。矣。醒。先。人。長。於。戲。
文。恒。作。謬。悠。悠。無。就。考。之。詞。寫。合。
無。息。過。之。情。以。言。單。辭。使。讀。
者。解。頤。而。不。止。既。以。其。伎。在。名。
於。世。須。知。人。就。其。無。根。傳。高。
而。亦。其。有。據。之。事。始。遂。搜。

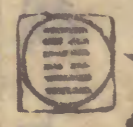
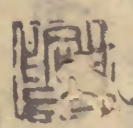
近世奇跡考 卷之一 〇〇三

生時之安。近辨俗說之妄。迺
稟錄為五卷。名曰古今奇記。
考云。一日携酒訪余村居。余
時會客行酒。老人不辭飲。在
席末。探懷出一小冊子。謂余
曰。願使先生一以此。價馬。余
已沾醉。乃笑而領之。其夜客
已散。將就眠。月尚射窗。

杜鵑頻傳絕響。因挑燈側視。
繡苑人書。似卧臨覽之初。翻三四
葉。順流讀過。則披卷之際。如
幽蹤而漸至佳境者。如武陵桃
源。步步着勝地矣。讀至其半。
另行百字裏。破支敵傳會之
浮說者。如入洞出洞。而持於子
世界矣。讀至其末。別圖所末字。

見所未見者如老矣相會設
魏晉以上之事矣其博稽者
搜使二百年間律事義法之
湮沒埋寃者洗雪扶植叙采
於再表白於今日焉又其仿拾
古人之遺遺函考往昔之風俗
時變而證之其言恠爽朗醒
士君子之眼者非前日戲文措
詞

取媚之類也其法法解誣之功
六六為不白之冤全篇讀
畢而掩卷則村鐘報曙遠
興掃閒窓子自酌卯酒三
杯攬筆而書之
曆紀文化元年甲子五月就生日
關東醉翁 朋齋撰



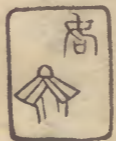
醒之老人好事士也。然其學不七牛首蛇類之書。天
 七地五之史。平生喜著小說野史。以鄙俚之言。善述人
 間常情。使盡如實無如有。又使讀者乍喜乍憂。乍樂
 乍悲。不知手舞足踏焉。是以無遠近。無上下。莫不知
 醒之而悅之者。嗚呼醒之為滑稽無用之言。而何使人
 至于此乎。蓋醒之既出於筆端。其素志不在此也。頃
 探二百年未可觀之聽者。名曰近世音跡考。如文人任
 俠。及俳優娼妓之徒。事然可傳者。訪之遺居。探之墳
 墓。以傳沉沒不傳者。訂潤色夫實者。如地理沿革。街巷

遷移。考之地圖。訪之古老。如遺器舊物。激之好事家。
 乃至童謡俚言之類。悉記以存焉。訂正之叢。考據之
 精。亮不為附會之說。實異乎前日諧謔之作矣。醒之
 之好事。於是可見矣。夫人徒奮高遠遺卑近。醒之則
 欲自卑近至高遠。其用心之良。有見解。世之悅醒之
 者。讀此書而後。知其有真可悅者也矣。
 文化改元仲夏。聽雨樓主人題

加齋卷大任書



二百年來御倉
 地下平町市喜
 生系不喜
 江車俗又是人何
 在樂城一杖



凡例

○古（年）を好（る）る人その代を考（考）てあることをやあるさうふあり千歳
 の物（物）を時ありて今あるもあれど近（世）の考（考）は久（り）りて
 疎（ろ）わ（り）て實（まこと）を失（は）ふりもあ（る）るむ隅（すみ）口碑（くひ）も傳（つ）ふるも虚（そと）
 妄（まこと）の（こと）をかわるる後の世ハ又今をい（い）へ（る）てあるもむ人
 もあるべきものをとみとおもひよりしより物を秘（ひ）箋（せん）も索（さく）
 事を珍（ち）書（しよ）も探（たん）舊蹟（きうせき）も（り）古墳（こふん）をたぐ（り）のふく思（おも）を
 致（せい）して其（その）實（じつ）を得（と）るもあぬバヤグ（て）あ（る）つげ（る）る反故古
 革（くわ）籠（こ）みみちぬもあ（る）ち俗耳（ぞくみみ）もち（き）きい（く）む（く）を撰（せん）
 出して遂（つひ）も劍人（けんじん）をたぐ（り）ハ（い）む
 〇おまひ片言（へびげん）隻辞（しやくじ）とい（い）ハ（い）むたぐ（り）し（き）據（と）を得（と）るハ（い）む

奇を好みまごさてある虚譚を述考疎りて口碑の誤
 を傳ふる説とおぼく見る事とありれどもあれども予
 考のあつざるもわづらひのそ後鑿を俟てあつたにせむの
 凡正史といへどもおぼむを記るものハらみあることを
 むふ便をくし源氏物語ハその書あれども其代のすを
 考るふハれも引もちうるごとく淺井了意井原西鶴等がこ
 水書離屋立圃菱川師宣等がざれ茲のこむもその代のおも
 むまをもてゆけるハいハ一をまねあて見ざるごとくありて
 証とまごさるやわづらひのそ由急に俗書といへども實におぼし
 きハそのもちめ引もちうる書名の下ハ上木の年號をま
 るまハをぬくの時代をまづ一むべきためあり

○おもひ得たる時イそグリークかきつけたる稿本のまじ上木し
 めぬづいでをまごめぬふと前後一且くまぬるもあ
 る一覽者あや一むとふれもとより俗近きをむ
 とまぬハ目あれざる雅文目あれざる雅字をもちめを識
 者のとあおはらるぬむことそおわづらめ
 證とまごさる古画あれハ原本をまごさるつ一ありて露路を
 てもたぐるむあはせり古圖あきハ其代のおむむまを考
 てあはれた画一む古圖と新画とハ画風を以てもち見る
 べ一古圖ハまごて予が自画あり覽者あやまらうて予が筆
 のつたあきを画者ふあふまらるまふれ
 ○此書まごてよりあしごとをまごつけたるものハあれども今に

近世書蹟考 卷之二

あつて百歳のいひや〜と又昔の質素をおとひて費をそ
ぶらむふはさき〜くもちる所あさや〜もあじも〜後
世ふ今をいひ〜てきた人あぶ〜りかうぐの便
あむむ歎

文化紀元甲子春三月

江戸

醒、齋誌



近世奇跡考總目錄

卷之一

- 一 懸想文賣
- 二 縫箔小袖
- 三 氣終頭巾
- 四 夜入道
- 五 左甚五郎家譜
- 六 三谷馬駄賃附
- 七 山中平九郎鬼女話
- 八 丸山筒花入
- 九 土手道哲并高尾

卷之二

- 一 上野花見
- 二 六尺袖
- 三 浅草海苔
- 四 女歌舞妓うらりき大夫
- 五 高砂屋看板
- 六 土手馬
- 七 成瀬川土左衛門
- 八 相撲櫓
- 九 小歌八兵衛

- 一 佐文山戲書
- 二 宗珉一輪牡丹目貫
- 三 右近人形
- 四 羽生村累古跡
- 五 安樂菴落語
- 六 鹿野武左衛門仕形話
- 七 辰之助鎗踊猫狂言并肖像

卷之三

- 一 古画相撲圖
- 二 淺草並水櫻并淺草寺船形手水鉢
- 三 吉弥結帶
- 四 古代山葵擦圖

- 一 紀文傳
- 二 久永平内石像考
- 三 小兵衛人形
- 四 歌比丘尼
- 五 露の五郎兵衛过話
- 六 大津繪考

- 一 牛若水偶衣裳
- 二 岡崎女郎衆
- 三 榎本其角傳

九 金龍山奈良茶飯

卷之四

- 一 其角雨乞句考
- 二 芝神明千木櫃考

- 一 夢市郎兵衛明石志賀之助事
- 二 秋色櫻并短冊
- 三 元祖團十郎傳并肖像
- 四 淺草六地藏石燈籠
- 五 白炭忠知
- 六 万治高尾出生地
- 七 虎屋七右衛門芝居
- 八 浮世又兵衛江口君圖
- 九 深見十左衛門傳

- 一 高尾取置兵水入圖
- 二 蝶贈宗珉文
- 三 淺草楊枝店始原
- 四 三浦高尾考
- 五 薩摩寺小平太
- 六 英一蝶大津繪讚
- 七 大高子葉烟管筒

卷之五

- 一 英一蝶傳
- 二 朝妻船讚考
- 三 篇懸讚考
- 四 助六狂言考
- 五 十寸見河東傳
- 六 竹婦人傳
- 七 万字屋玉菊傳
- 八 玉菊拳マツ
- 九 腕の喜三郎
- 十 鎌田又八
- 十一 加賀千代屋傳
- 十一 大橋柳町考
- 十二 地黄坊樽次酒戰
- 十二 鹿藏猿次郎

以上 通計七十一條

目錄終

近世奇跡考卷之一

江戸

山東軒主人著

一 懸想文賣

淺井了意あさひのり曾そ呂里狂歌咄ろりきやうか 寛文十二あき 日ひ 往當正月元日の何な たり
年板本 十五日まで。年毎ねごと 無想文むせんぶん とて賣うり。其出立いでだて 赤あか 布衣ふえ 袴はかま の
そ 編笠あむがさ をか 覆お 面めん して。都みやこ の所ところ を賣うり。是こゝ を買か 入い る人ひと あれば
わ 紙かみ の中なか 洗あ 米い 二に 三さん 粒つぶ 入い るを。無想文むせんぶん をあづけて後あと
一 錢せん より百ひゃく 後ご まで代か 入い る人ひと の心こゝろ あらうを。相あ 互ひ の祝いわ 言げ 買か 入い る人ひと。
外 何なに も。のを びび りり を。ささ めめ ぐぐ めめ でで ぐぐ づづ けてけて 打う とと 振ふ ぐぐ 。

懸想文賣圖

寛文十二年印本
曾呂里狂哥咄
古音模出ス

詞花堂藏本

元禄六年板本
誑諧系筋に
あま文賣のう
とあつて狂哥咄の
説をかあつてあ
くもト一ツ



かちろく賣りる詞やさうきとえ一を時世のあつさぬおち
つされ今ハさ絶りもふや此ころさうき人ハあつさるもはし是ハ祇園
の犬神人ソツありや又ハ桂の里より出る男あやそのおるをを知らざ
○按るん。魚文とハハツ。女文のさぬあけるものみあふぞ。紙符を魚文と
あづけて。いまご嫁せざる女の良縁をいのりしものあつめ。己お寛文の頃とん
らふ。か文以て誑もさ。○俳諧の季子とせお入。寛文三年印本増山の井
みえあつらとめ。その以前みえるるあり

二 上野花見

此第一本云東叡山黒門より。仁王門までの並木の極の下ハ花見
あり。松山のうち清水のじろふ幕よりらじしてえる人おち。幕の
かちさ時ハ三百余あり。さくあき時ハ二百あまり有。此外おつ
ちくる女房の上忌の小袖。男の羽かりを。糸あつらげたる細引
布にて。極の本おひつけて。かうの幕おして。毛氈花びらるる

酒のむく物ハあり。小歌淨瑠璃踊仕舞ハもがむらりあり。本町通り町を始。省徳あるもさもあきし。町々わて女房娘。正月の小袖も云ハ仕立也。花見小袖まで成あど子をこめ。結構ふどてある物むきにあらくるをきめておろえ。花ようあを見よう。花の吹ハ空くもりて。おわろと昼過より雨ふる。おろぬとも傘をもさうぞ。よさ小袖をすさよゆじてうをを。巻山も又よかかふおももさうぞ。云此文天和中のありきをすまのありり又うさう。

○其頃の婦女の小袖ハ結構といへとも。緒袖をかきつとて。今よりえぬバ甚質素あるものあり。

三 縫箔小袖

昔の婦女ハ。縫箔の小袖を礼服とす。京六条小傾城町ありし時。寛永の頃までハ。抱女も地一縫箔の小袖。有り箔の小袖をさくくらぶ。島原あつりしより。縫箔も。いつたの鹿子を禁せられし。は。箕山が大鑑

原あつりしより。縫箔も。いつたの鹿子を禁せられし。は。箕山が大鑑

延室中 ふる本 又也。好事の者。惣物のかぎりあどに用て。今ハ残れるをえる。ふ。緒小麓畧ある縫をて。そころぐ摺箔をて。さるものあり。今地白地黒あど云もの。其遺製歟。いつの頃より金糸の繡いでそて。縫箔ハやみ。唯縫箔屋と云名の。残れり

四 六尺袖

古代といへとも。緒箔ハあみくの者の名をてあたハざる衣服之とされし。おろくハ緒の地あて。緒も甚麓畧あり。これ等を又ても昔の質素をかもふべし。

延室天和のころ。五尺一尺五寸を大なり袖と云。たんどふれく六尺袖を。そくくひハ。其頃のころぞ。一尺五寸四ツ。春臺の獨語。ふ。さての男女の衣服むくハ。極て質素。男子も女子も。十四五尺ハ。さ袖。残れり。昔ハ。一尺七寸八寸を。極りさせし。貞享の頃より二

新古今和歌集



天の久し
和の年
上野の花見圖



新古今和歌集 卷之一

尺むろふあり。夫よりやうやく長くありて。近きは二尺四五寸ふありぬ云。一蝶が四季繪跋。小髪のととをりをもこえむ。やう袖大路をまゝに書し。延宝天和の頃。享保の頃。大子風俗のうらり々ることをしるありけり。

五 氣終頭巾

獨語 江戸の婦女外ふつろ。昔ハ氣終までくろき緒めて頭

面をつみ。目むろりをあつり。其後綿あて頭面をつみ

ハ。我廿あまり宝永の頃まであつり。云々。安あつろ。今江戸ふ

お高祖頭巾云々の氣まゝ江中の遺製あつん

五元集 目むろりを氣終頭巾の浮世哉

其角

縫箔

木村太朝藏

摺箔

或云箔箔印キニノ種類

山東藏



此ヘリスベテ箔

地此系リニズ。縹系青黄赤鶴リニホウ菊スベテ箔



地白茶結。地紋金銀箔



縫箔



地茶リズ
扇細淺黃白崩黃桃色
等ノ色糸ヲ以テ縫
水金摺箔

木村氏所藏

六尺袖圖

貞享四年印本女用訓蒙圖彙此書ありまことついでこふあふは貞享の頃の婦女のさぬとんふとれり



蕙斎藏本

六 淺草海苔

其角が焦尾琴元緑十

上畧 石原の椎乃ちげいそに。人目まれあゝ境ふハ小家そむさくこてあて。いさふ川すぢ浅漫一さる皆この流ふ入

其引

所の産を寄て

行水や何おもむさる海苔の味

其角

雨雲や筆ふ干海苔の片明り

文士

案らふ。右前文に石原の椎とゆけら。本石系。椎の本ヤ一きよふあふりあふ。浅草名物の干海苔。びりハ浅草川あてこねを寄る。そ二考御衣一さるより。伝れども。いつの頃まであふあり。や詳あふむ。右の二句を考おハ元禄の頃まで。浅草あて製一さるとおむ。海苔とあきふ。中島を其おむり。浅草川あてさる。いさふ遠きふとさる。品川よりあふ海苔とさる。浅草あて製一さる。ちささささ。極品の海苔ハ。年一だり。まさまで。浅草あてさる。ささささ。

七 夜入道

月影のなほふれふゑぐく。まむい夜入る。うらさうらみや

山の井

望月の影をふふく似る哉と思ひ屋を
籠ふ似るうらみやへ夜半の月
籠屋 立圃

此句正保の頃の吟

八 女歌舞妓うらま太夫

そらろ物語 小見ハ今。うらま太夫 大門通りふあて。来ル三月五日うらま太夫

のぶきをうらあり。日本橋ふ高札とらる。江戸ふ名を得。女歌舞妓
布とらる。中あもらうらま太夫。世ふ越えあかやうらま太夫。客顔美鹿
あうらま。此女歌舞妓とらる。老若貴賤らん。見物とらる。同時
中橋ふ。島丹後守とらる。女歌舞妓あり。は。日書ふらる。骨董集ニ

。右そらろ物語ハ寛永十八年の板本之 杏園 藏本

九 左り甚五郎家譜

仏殿山門等の彫物古雅あり。由来由一うらま太夫。みどりになり
甚五郎が作あり。うらま太夫。名譽うらま太夫。うらま太夫の時代は
此の所の人と云ふ。詳ふ知る人あり。其譜を得て。始て時代
を知る。左の如し

左甚五郎 伏見人寛永十一甲戌年 四月廿八日卒四十一歳

左宗心 元禄十五壬午年三月 十五日卒七十一歳

左勝政 京今出川寺所住 享保十二丁未年五月十三日卒

以下畧

元禄三年板 人倫訓蒙書 天正の頃左り甚五郎の名人あり云々
龜文公判云。左甚五郎ハ關東ハ不束播州明石不任りらる。

十 高砂屋看板

日本橋室町一丁目商家の軒の上に高砂尉と號の古き木偶あり。左り甚五郎が作と云傳ふ。案あるは原是高砂屋清なるもの葉子屋の看板也。其葉子屋ハ貞享板の江戸鹿子ものりたる舊家して。室曆の以迄ハこそ住一が。他所ハ繕定せし時。彼木偶亦重ありて。不思議の事ぞもあはく。此地を去ることとを云ふ。ふよりて。せんをばあく。こふ残一おらぬ。今ハ不用のものあれども。モ雲あることとをされて。そののけぞとぞ。さるものおもあはぬ。一百余年を居る古物。及くの火災とのりて。今ハ残ぬものぞト

十一 三谷馬駄賃附

三谷通の若人等ハ白馬白鞘の刀。白革の袴。白くりの袖

るりあが。まて白きを以て風流のりき。寛文二年板。小歌惣まくりと云か。ふふあうて三谷へ通ひ。駄賃附あり。左の如し

所より吉系追駄賃附の事

一日かむりより大門まで 並にだちん貳百もん

馬奴二人こむろゆーうたふがうり白馬駄賃三百四十八文

一飯田町より大門まで 並にだちん貳百もん

はご二人あむろゆーうたふ銚白馬駄賃三百四十八文

一浅草見附より大門まで 並にだちん百三十二文

馬子二人あむろゆーうたふうごり白馬だちん二百四十八文

是白馬を好し。証之。又明曆の頃の小歌。春の日のいとあはけ。て柳とをるハゆくぞ。ちろき馬あけ。ころあ。こよ。う。う。ひ。は。は。

白馬騎不行。章臺折楊柳。と云。唐詩の白をヤとけける歌あり。又白くりの袖べりを好む一証あり。五元集に

袖裏や如よりけお白くり

其角

今の世。歌舞妓狂言六方丹前の奴僕。ふ撈まる。お白羊。あり。白袖。口。白裏。白キ帯。あき用。え。まら。ふ古風の残。ゆる。あり。ド

十二 土手馬

浅草寺境内。ふ。馬道と云名の残。ゆる。三谷。の。通路。ある。ゆえに

五元集 朝嵐馬の目でゆく顔中哉

其角

日 土手の馬くらんをむげふ菜つみ哉

日

右の白。お土手馬。と。い。る。も。三谷馬。の。ま。今日本。境。み。立て。船。く。と。よ。ふ。船。人。を。土手馬。と。い。ひ。嫖。客。お。つ。ま。て。揚。銭。さ。り。不。行。日。雇。の

者を附馬と云も。むりーの遺言あり

十三 山中平九郎鬼女話

普世。ふ。か。く。る。話。あ。れ。ど。も。く。り。か。ど。も。傳。へ。て。い。ふ。山。中。平。九。郎。一。時。我。家。の。二。階。お。上。り。て。鏡。み。む。り。ひ。狂。言。怨。霊。の。顔。を。ま。め。ぐ。お。工。夫。一。も。や。せん。く。や。と。い。ふ。ま。も。眼。を。よ。せ。口。を。せ。り。ま。心。み。学。ば。せ。て。あ。い。ま。く。お。も。ひ。を。こ。じ。自。然。と。お。の。水。も。お。そ。り。一。き。む。り。の。仕。え。を。工。夫。し。か。つ。て。こ。を。よ。け。れ。鏡。を。ま。ふ。り。て。お。お。え。ど。立。上。り。死。心。霊。の。身。ぶ。り。を。ま。る。折。し。も。其。妻。何。の。心。も。あ。く。二。階。お。上。り。お。も。ひ。ら。む。其。あ。り。ま。分。を。見。て。こ。や。の。う。と。ま。け。び。の。け。ま。ぬ。お。あ。れ。て。死。入。り。ぬ。家。内。の。者。そ。の。看。お。む。ろ。ま。て。二。階。お。あ。り。ま。り。氣。付。い。ぬ。あ。ら。あ。ら。と。う。く。一。て。や。やく。い。ま。え。り。ぬ。平。九。郎。思。ひ。ら。ぬ。我

執げいせ精せい身しん入いりて我妻わがつまをとりかかのごここ。べべんんや他たの見物けんぶつをとる。
大おほふふろろととひひ則すなはちに工夫くわふを以もつて狂言きやうげんせせに果はたして見物けんぶつ群集ぐんしゆせし
とど江戸著聞集江戸著聞集よよふ書かきふ妻つま急隅田川いそよまたがわと云い狂言きやうげん彼妻かのつまが絶ぜつ入いせ
一時いちじの工夫くわふのよよししををかかけけるる非ひあり。それそれより以前いぜんののよよししののよよしし。いいつ
水みづの狂言きやうげん少すくや。詳つひひらありありと。案あんるるよよ平九郎へいくわうハ實じつ惡あく古今ここんの名人めいじん俳名はいな
をを仙家せんかと云い元禄中げんらくちゆうを盛さかふふ経へて。享保九辰年五月十五日没谷中
常在寺じやうざいじ日蓮にっぜん小葬せうざうる。法名ほふなを冷山院壽仙れいざんいんじゆうせんと云い首くび像ざうをとりり
十じゆ成瀬川土左衛門なるせがわどざゑもん

享保九年午六月。深川八幡社地の相撲ままひの番附ばんづけを見みし。成瀬川
土左ど衛ゑ門もん奥州おくしゆう前頭まへづらののどどののああり。案あんるるに江戸えどの方言かたげん溺死どくしの
者ものをを土左ど衛ゑ門もんと云い成瀬川肥大なるせがわひびの者もの也なり。水死みづししてして渾身こんしん暴はら

ふふりりるるをを土左ど衛ゑ門もんの如ごとししと戯あそびびつつひひ方かた言げんとありありと
云い八百屋やちひやくが七しちの狂言きやうげん。土左ど衛ゑ門もん傳でん吉きちと云いあるあるも。成瀬川なるせがわが名なををか
り用もちるるものものとぞ。以上友人照義あづみよしの説せつ也

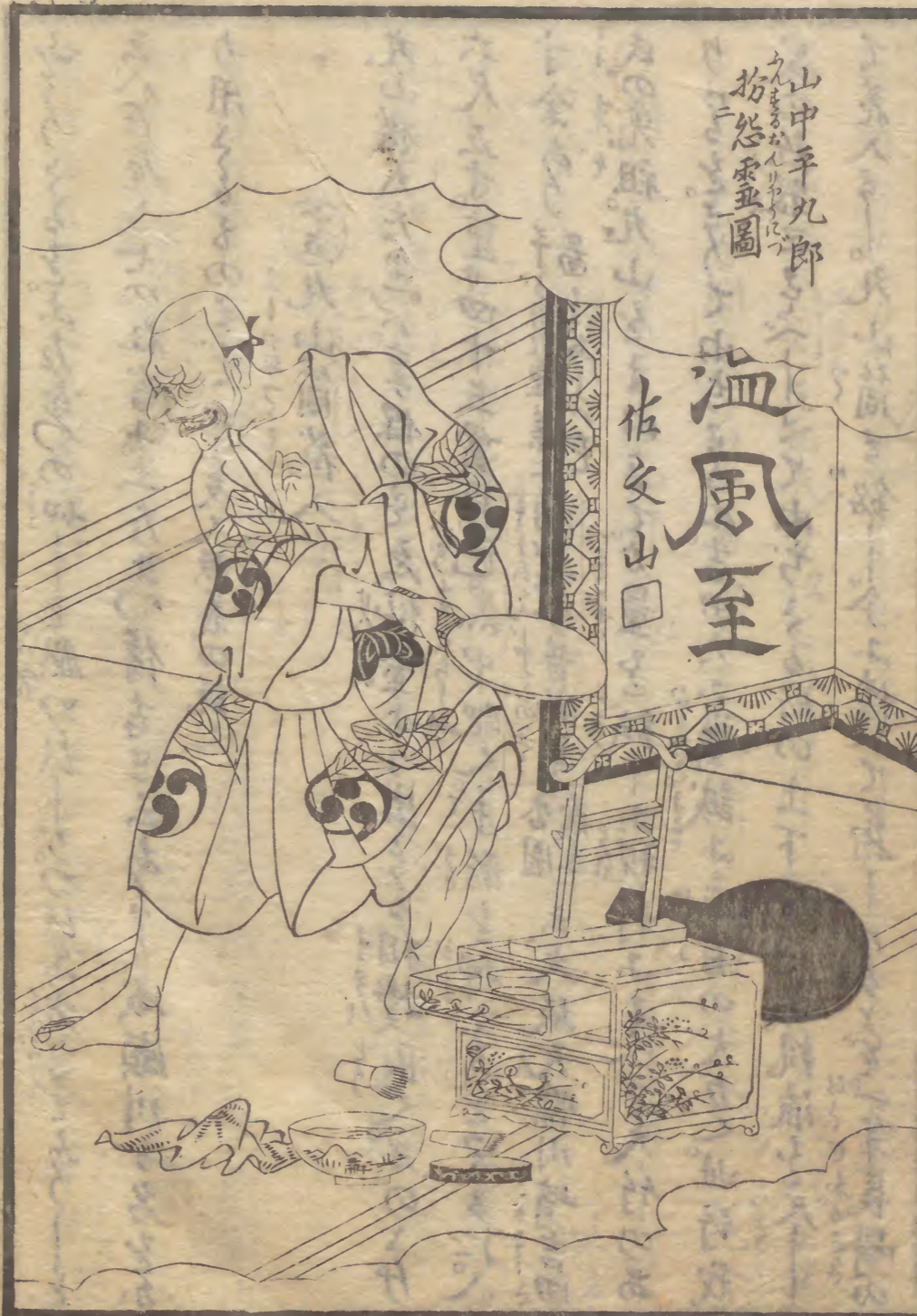
十五 丸山筒花入まるやまづつむぎいれ

丸山まるやま権太けんた左さ衛ゑ門もん。享保きやうほののとと云い仙臺せんたいより出でるる相撲ままひ取とるる身みののよよけ
六尺五寸。重おもさ四十三貫目。色いろ黒くろ中ちゆう肥ひくく手形てがたをを押おすするるをを多おほくく。八
寸余はちすんあまりあり。予よが骨董集こつどうしゆに相撲ままひ今昔物語いませきものがたり蔵本くらほん云い大坂おほさか天幡川てんぱんがわ崎吉田さきよしだ
氏うぢの先祖せんぞ丸山まるやまををままぬぬささて。力量りきやうをを試こころしし。規竹きちくふふままべべきき大竹おほたけののあ
りりららををここりりてぬぬぢぢららぬぬ吉田よしだ大おほ驚おどろ誠まことふ希有きゆうの大力たからちから也。此竹こゝろ我
家わがやの孫器まごころももととべべーーままここてぬぬぢぢららるる竹たけの上下じやうげををここらら。風流ふうりゆうをを尽つすす
て花入はないれとといいふふ。丸山まるやま筒づつ花入むぎいれ銘めい。今いま傳でんへへてて花はなららとといいふふ。一年長崎いちねんながさきの



山中平九郎
 九郎が人形に
 扮して
 怨霊を
 退く
 圖

沍風至
 佐文山



相撲ふ下り。彼地ふて才まうりぬ。因ふ浩吉室寺と云禪寺に葬る。長
崎の入口日見峠と云道のわくつ小墓あり。法名丸山良雄信士
丸山曾ていふまお丸山ありて山のこころありしやまお丸山と云墓
のわくつらまをかまらふつくり。痛のこころま石をわけり。まをまぬ
夢大撰 蓮華會集

一つらみいざまろとせん年の豆

十六 相撲櫛

元禄の頃を盛りふ経る。兩國梶之助と云お撲れ櫛をさし始
しより。まは前髪あるお撲取。櫛をささるりまやりて鬼勝象之助
面白粉をぬり。二枚櫛をさしりより
相撲大全おすぬ。何の由
ふあうせしまふ。まは前つけまふまをささるりまやりけるが彼等
そぬをつたあきまろ。まをまらるる証として。櫛をさしりよりまを

丸山権老なまつ

法川の世ハ土山櫛を相撲取

沾徳

此句 文蓬菜 ふすぬ。鬼勝が身まうりしをよみし句とあん

○兩國梶之助 因幡。丈ヶ六尺一寸五分。鬼勝象之助 紀伊。丈ヶ七尺三寸
重カ四十貫目

十七 土手道 哲并高尾

吾原恋の乃引 延宝六 堤のわくつにまかまらある菴あり。是をいふ
まにあにさうし明暦の頃より。な哲まうりし心者世をむつりく
や思ひん。あまわらした。まふ菴をあん結びて作ら。二六時中
鉦の声とえせむ。あまつらうらふまえて。へうまらも哀をもよまぬ
あま云 此紫の一本 天和三 小。日か堤のまらふ。な鉄が寺あり。あまもの
おふ淋しきをな鉄が鉦の声をあり。今まや百作がの小奇ふ。ま
つちでうてな鉄が唱も此奇云 事跡合考 延享三 与本 小。今戸橋
杏園 存

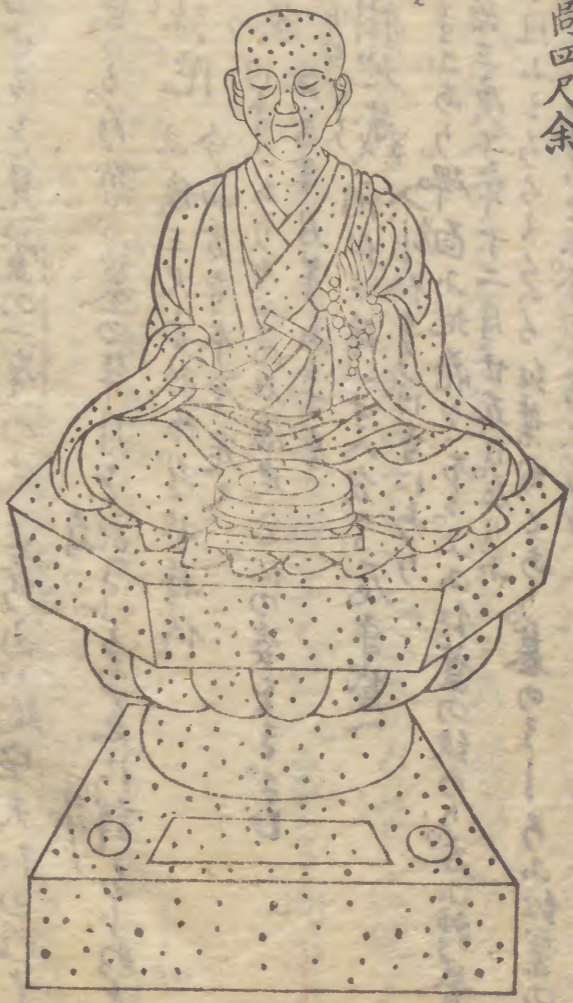
新編 西行集 卷之二
の南。木戸まへの西方寺せいほうじ云々の前まへが土高つちたかき所空地ところくわちにて十
間斗せんりの長さ幅はらみハ二間にかんむらりもあらん所昔むかしつみんぞを刑せいせしれ
らるる。その時ときを哲てつと云ふ心者こころしやう。彼罪人かのざいじん仏果ぶつぐわ得脱とくだつの爲ために昼夜やふか念ねん
仏ぶつ一いつころしが滅めつ後ご此西方寺せいほうじ小菴せうあんりしゆと云ふ。其哲てつの唱なやあり云い。治涼説ちりやうせつ
小弘願山せうくわんざん専称院せんじやういん西方寺せいほうじ。開山かいざん念ねん誓せい上人じやうじん之の巡じゆん行ぎやう及及び哲てつハ住職ぢゆうしやく小あらんを
常念じやうねん仏ぶつ發起あつぎの願ねん主しゆ乃すなは心者こころしやう之の徳とくある僧そうにて世人じやうじん當あた寺じ開山かいざんのやうに
云い。云い。云い。

案あんより。其哲てつ在俗ざいじやくの時とき。三浦みやうら屋やのう尾おが私夫みやぶあり云いハ妄説まうせつ之の事跡じじやく
合考がうかうの説せつのごとく。罪人ざいじん得脱とくだつ抜苦はくくの爲ために定念じやうねん仏ぶつ一いつ。こ小吉原こよしかはらのごとく
トとざる以前いぜんより作つくらるる心者こころしやう多おほき疑ぎあり。土佐とさがごとく。三世さんぜ二河にがは白はく
道みちと云ふ。其尾おを哲てつが教化けがわふよりして成仏じやうぶつ一いつと云ふ。トと作りし

より。虚妄こゝろよまを傳つたへ一いつあらん。予よ西方寺せいほうじ小あらんよりしてとらぬた。其哲てつ万治三
年十二月廿五日。高尾たかお同日どうじつ小菴せうあんと云ふ。其尾おを引ひふ。其哲てつ菴あん
の番ばんを出だせると見み。紫むらさの一いつ本ほんの文ぶんを考かんぬ。延宝えんぽう天和てんわの頃ころまで。あらん
アヤふ思おもひ。其哲てつが墓かぶの年月としげふを記しるさるる由よし名なに詳あらぬと云ふ。り
○汗あせかきの弥陀やだ。立像たつざう三尺。安弥あんや作つく。其哲てつ持もつ。今いま西方寺せいほうじ本ほん堂どう是こゝに
○道哲だうてつ之の墓かぶ。日寺にちじ小あらん。其哲てつの石像いしざう。定念じやうねん仏ぶつの姿すがたをままさむ
○高尾たかお襟えり掛かけ地藏ぢいじやう。洞どう仏ぶつ立像たつざう。一寸いっしゆん八分はつぶん。其尾お守まもり袋ふくろ一いつ
○同墓どうぼ。日寺にちじ小あらん。碑いし面めん小地せうぢをある。上うへ小紅葉せうもみぢの紋もんあり。右みぎ小轉てん答た妙めう身しん信しん女にょ
○同位牌どうゐはい。日寺にちじ小あらん。法名ほふな前まへの如ごとし。
○同所どうじよ持もつ羽う子こ板いた。日寺にちじ小あらん。下した小
番ばんをあたふ。

道哲墓之圖

惣高四尺余



高尾所持羽子板圖

七寸五分

四寸三分



表裏ともに惣金模様
墨時繪。紋床。古風ありもの

からぬ
赤糸
赤糸
あり

此金具ハ後おつけて
奈イハ
ふまゝのもの

万治中の高尾の
を
此羽子板の
と
も
ハ

高尾所持羽子板

高尾所持羽子板

高尾所持羽子板



土手道哲菴圖

延宝六年板
菱川繪本
呂ヲ摸ス



五十七 古蹟考 卷之一

○附 同所三谷町春慶院の中。尾の墓あり。後名録世にあり。是れは。死せる年三月廿一日。治二已亥年十二月五日。是れは是れなり。

十六 小歌八云浦

貞享の以。浅草田町小住。三味線の師。小歌の上。よあるふよりて。名づくること。

洞房語園 元文三年印本 小云。小歌ハミユル娘。釋多ヲ不發して

出奔せしを。ハミユル腹立して久離し。時並水壽見翁が狂歌小

ぬとあつる娘が中ハ海老尾かよわつて小歌ハミユル

○案 青見翁ハ吉原角町に住ス。其角門人ハ俳名と不曲といふ

五元集 八云浦やあつるまゝい虎が雨 其角

此句も小歌ハミユルが子と云ん

奇跡考卷之一終

